

オケのテイキは、おもしろい レポート

2014年6月東京定期版



オヤマダアツシ (音楽ライター)

マイケル・スペンサー (コミュニケーション・ディレクター)

■ワークショップの達人、美大生とシベリウスに挑戦

定期演奏会で取り上げられる曲をテーマに、オリジナルの「音楽」を作り上げる過程を通して、作曲家や作品へと近づいていこうというワークショップ、それが今シーズンからスタートした「オケのテイキは、おもしろい」だ。音楽ワークショップという、その多くは子供たちも含めたファミリー層をターゲットとしたものだが、このシリーズはそれに止まらない。先月の本誌でもレポートしたように、長く日本フィルをお聴きになっている定期会員の方々（つまり大人の皆様）も体験し、新しい発見ができるエデュケーション・プログラムなのである。

その中心で参加者たちをリードするのは、この4月から日本フィルの「コミュニケーション・ディレクター」というポストに就任したマイケル・スペンサーさん。長くロンドン交響楽団に所属し、多くの有名指揮者とともに名演を生み出してきたヴァイオリニストであり、今では世界中から注目されるワークショップの達人なのだ。その内容および進め方は、初めて体験する方にとって驚きの連

続だろう。

今回のテーマ曲は、6月の定期演奏会でピエタリ・インキネンが指揮をするシベリウス作曲の「夜の騎行と日の出」。モーツァルトやベートーヴェンといった誰もが親しんでいる作品ではなく、もしかすると東京で演奏されること自体が珍しいシベリウスの交響詩なのだから、難しいのではないだろうか。

マイケルさんの周囲に集まるのは、女子美術大学でアートを学び、東北の被災地なども含めた学外でアートと社会との関わりを追求しているヒーリングアート表現を学ぶ学生たち、およそ30名。ヴァイオリンやリコーダー、フルート、クラリネット、ハーモニカなどを持参した人も多く、会場となった学内の「110周年記念ホール」は音楽を演奏しようという期待感にあふれている。ところが……マイケルさんが最初に「それじゃ、みんな用意はいいかな」と始めたことは、実に意外なものだったのだ。

■ギャロップから始まった、新しい「音楽絵画」の誕生

「まず最初に、これを踊ってみよう」と流れた音楽はシベリウスでも他のクラシック作品でもなく、PSY というシンガーが世界的にヒットさせたダンス・ナンバー「江南(カンナム)スタイル」。続けて19世紀のウィーンで大流行したという社交ダンス。どちらにも共通するのはギャロップという跳躍のリズムである。全速力で走る馬の動きを表現したギャロップは、まさに闇夜を馬で駆け抜けるというシベリウス作品の重要なモチーフなのだ。

「まずは身体でその音楽の本質を覚えてしまってください。音楽もアートも作品の素材となっているものを見つけ、その構成やパターンを見出すことができれば、自分たちが新しいものを創造する際に何をすればいいのか理解できますからね」。

次の過程では、白い馬、フィンランドの大自然、幻想的なオーロラ、そしてついに作曲家シベリウスについての情報やイメージが与えられ、ギャロップのリズムへ肉付けされていく(美大生の中にはフィンランドからの留学生もおり、彼女たちからも重要なヒントが提供された)。学生たちは、それぞれが考えた「夜の騎行」のイメージを具体化して、シベリウスとは別の

「音楽絵画」を創造。マイケルさんとは何度もワークショップ体験を共有してきた日本フィルの楽員たちも、アドバイザーとして加わっている。

マイケルさんは学生たちがアートを学んでいることに着目し、今回の構成を考えたとのこと。「視覚的な要素の強いアートを学んでいる彼女たちと、聴く芸術である音楽がどこで出会い、つながるのが興味深いですね。今回は、彼女たちがこれまで学んできた知識や感覚を生かせるようストーリーが組み立てられているんです」。



静かで幻想的な「夜の騎行」を作曲したチェロの大澤チーム。

そうして生まれた作品は、シベリウスが表現しきれなかったであろう多種多様な音、オーロラや日の出のイメージなどが加わって、実にユニークな世界を創造した。「私たちがキーワードにしている『Learning by Doing(やることで学ぶ)』は、自分たちから音楽の内面へ入り込んでいくことなのです」というマイケルさん。考えるよりも行動。チャンスと期待と少しばかりの勇気がありましたら、皆様もぜひマイケルさんのワークショップ体験を！



風景、時間、登場人物、気持などをグループワークで絵を描く時と同じ方法で、音楽をつくっていくヴィオラの中川チーム